

---

## 第?部 ~ Belial ~

高里奏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

第?部 ～ Belial ～

### 【Nコード】

N3092W

### 【作者名】

高里奏

### 【あらすじ】

月の夜、リリスは異形の者と出会う。その日から彼女の身体は刻々と変化を続け、人と異形の狭間にて境界を感じる。

藍蔑離紅閉鎖に伴い移転。

## 境界

月に横顔が妖しく輝く。

今宵は満月だ。

月の中の横顔を覆うように大きな黒い影が見えたような気がする。それは不気味な蝙蝠を連想させる。

ただなんとなくそれに惹かれていくようなそんな感覚がした。

影がだんだん近づいてくるような感覚に襲われ逃げようとしたが、少女はその影に対する好奇心で動けなかった。

影は、少女の屋敷の塔の上にある悪魔の像の上で止まった。

それは人間のような姿だった。異形の者だ。彼女はすぐに理解した。この村は、いまだに異形の物が人間を襲うという事件が後を絶たないのであった。

彼女は不思議に思った。なぜ異形の者が、自分の屋敷の悪魔の像の上にいるのか。悪魔なら逃げ出すのではないかと。

影の主は、彼女に気付いたらしい。像の上から舞い降りてきた。その姿は、黒い衣服に身を包んだ人間のようなだ。

深く被っている帽子のせいで顔も年齢も性別もわからない。ただ、衣服から男性なのではないかと思われる。

不意に影の主が話しかけてきた。

「お嬢さん、このような夜中に出歩いては危ないですよ。夜は異形の者が支配する。最近はここらで、あなたのような若い娘が死体で見つかるということが多くですからお気をつけてください。…最も

わたくしがその異形の者かもしれませんが……」

彼は妖しく笑う。

「だ、だれ？」

少女は恐る恐る訊ねた。

「これは失礼。わたくしはベリアルと申します。貴女に惹かれ此処に誘われた者」

ベリアルと名乗った男は帽子を脱いで一礼した。

「ふざけた人ね。ここに居てはあなた、明日にでも警察に連れて行かれてるかもしれないわ。はやくお帰りになられたほうが宜しいのでは？」

少女はこの不思議な男に興味をもった。

「どこか、惹かれていく。本能は危険だと告げているのに逆らうことが出来ない。」

「では、貴女の名を教えてくださいただけでしたら、今宵は帰ることにいたしましょう」

男は妖しい笑みを浮かべて言う。

少女は戸惑った。この男に名を教えてよいものか……。

しばらく迷ってそれから一言「リリス」と短く答えた。

「それでは、リリスまた明日、会いに参ります。」

そう言っつて、彼は闇に消えた。

「どこにいったの……」

彼女は残されたなぞと、また明日という言葉に再び戸惑った。

翌朝、目が覚めたりリリスは不思議な夢を見たような気がした。

まさか、自分の家の庭に見知らぬ男がいるわけがない。

庭は安全が保障された空間であるはずだ。

「ベリアル……」

聞きなれない響きの不思議な名前だった。異国の人間だろうか。いや、そんなはずはない。あの者は異形の者だ。

その日、何故だかりリスは、教会に入るのが酷く嫌なことに思えた。

その空間が酷く穢れたものに思え、聞きなれているはずの司祭の声が異形の者の断末魔の叫びのように酷く恐ろしいものに聞こえた。どうしたのだろう。

自分も異形の者になってしまうのではないか？

彼女は酷く不安に思った。

ベリアルと名乗ったその男は酷く美しく不思議な魅力があるような気がした。何故か心が惹かれて行くのを彼女は感じ取った。

同時にそれがとても罪深いことだということも。

教会から出たときはすでに疲れ果てていた。こんなに気分が悪くなったのは初めてだ。何かがおかしい。

だが、自分の体の異変の原因は解らない。

妙なだるさに耐え切れず、一眠りする事にした。

すぐに深い眠りが訪れた。

夜。リスは眠り続けていた。

「お邪魔します」

ベリアルは鍵の開いていた窓から彼女の部屋に入り込んだ。

「可愛い寝顔ですね。起きるのを待ちましょうか」

ベリアルは、そっとリスの顔を覗き込んだ。そして、しばらく、

彼女の顔に見とれていた。

「花の香りがする……」

思わず彼女の髪に触れてしまいそうになったその時、誰かの気配がした。

「リリース様、失礼します」

おそらくはメイドだろう。突然の事に驚いたベリアルは側にあつたクローゼットに隠れた。

「そろそろ起きてください。お食事をお持ちいたしました」

「うっ……ごめんなさい。気分が悪くて……」

（目覚めてしまった……）

彼女達の会話を聞いて少し寂しく感じる自分はどうかしてしまつたのだろうか？

ベリアルはとても不可思議でならない。

苦しい。それはリリースが苦しむからだろうか？

既に痛覚は機能していないはずの自らの体の異変に戸惑う。

クローゼットの中で眩暈を起こしそうになる。

僅かに開いた隙間から聞こえる少女たちの声に耳を傾け、壁にもたれかかるのがやっとだった。

ふと、リリースの目に十字架が留まった。

（気持ち悪い……）

「……ごめんなさい。その十字架外して下さる？」

メイドのナンシーは不審そうにリリースを見た。

「どうしました？ この十字架が何か？」

彼女は自分の胸の十字架を少し持ち上げた。

「お願い！ 私にそれを見せないで……！」

リリスの気迫に負け彼女はあわてて十字架を外した。  
十字架が恐ろしい。

それは十字架が死を暗示させるものだからだろうか？

いや、そうではない。

十字架自体が恐ろしいわけではない。

「一人にして頂戴」

食事はいらさないわと告げ、ナンシーを追い出す。

独りになった部屋で、彼女は慌ててカーテンを閉めた。

「なんなのよ……」

自分が分からない。恐ろしい。

リリスは自分を抱きしめて震えた。

## 悪夢

「こんばんは、リリス。お体のほうは？」

リリスは驚いた。自分の部屋に昨日の男が居たことに。

「な、何で居るの……」

「すみません。つい」

「ついじゃない！」

なんとも非常識な男だ。

「それで、お体のほうは？」

ふとそう聞かれ戸惑った。何を言っているのだろうか？

「べ、別に……」

正直に告げるのも悔しい気がしてリリスは黙り込んだ。

「本当ですか？ わたくしには貴女の体が着々と変化を遂げているのが手に取るように分かるのですが？」

「どうということ？ 何を知っているの？」

リリスは怪訝そうにベリアルを見た。

ベリアルの上にはなんとなく思い当たる節はある。刹那、不安に襲われた。

「今の貴女にわたくしの言うこと的一切都を受け入れられるだけの余裕は無いと思いますが……。少し休まれたほうが良いでしょう。貴女が眠りにつくまでは傍に居ることを約束します」

そんなことは望んでいない。

ただ、ベリアルの言った『変化』というものが気になるのだ。

「いいから教えて。変化って何？ どういうこと？」

リリスは静かに訊ねる。けれども彼は答えない。

「今の貴女に必要なのは休息です」

リリスは急激に眠気に襲われ、そして闇に落ちた。



そこで夢を見た。

突然背中に激痛が襲う。

いや、熱だ。灼熱が背中に走る。

体が融けてしまうのではないかと思えるほどに熱い。

背中が裂けるような錯覚。

まるで羽化をする。蝶のように。

蛹のような皮膚を、翅が突き破る。

リリースは目を覚ました。今までに無いほど大量の汗をかいた。本当に自分はある変化を起こしてしまっただろうか？  
ベリアルが言っていた変化とはこのことなのか？  
それは悪夢以外の何ものでもない。

「ベリアル…いる？」

「ここに」

呼びかけてみるとすぐに返事が来た。一安心する。

何故か彼が居ることに酷く安心した。

「どうかなさいましたか？ リリス」

ベリアルは心配そうな表情でリリースの顔を覗く。

「ベリアル…夢を見たの…背中が急に熱くなって…」

「羽化する夢ですか？」

すべてを言い終わる前にベリアルが答えた。

「な、何で知ってるの？ まだ言っていないのに！」

「やはり変化は始まっているようですね……」

ベリアルは質問には答えず、ただ一人納得したようだった。

「申し訳ありません。どうやら私は貴女を巻き込んでしまったようです。ですが、ご安心を。必ず貴女を元に戻す方法を探して見せます」

ベリアル表情は帽子に隠れてよく分からない。

「どうということ？ 元に戻すって？ 教えて！」

リリスは叫んだ。

「貴女の体は変化いたします。先ほど見た夢のように。貴女はすでに半分は人間ではありません。半分は人間で、半分はわたくしと同じ……」

今まででも十分に驚いていたがその後の言葉はリリスをさらに驚かせた。

「半分は、わたくしと同じ悪魔です」

あくま？あくまってあの悪魔？ 異形の者のなかで最悪とされるあの悪魔？

「そ、それ本当？ 悪魔って、そんな！」

自分が恐ろしい異形の者？ ベリアルが最悪の悪魔？ 信じられない！

「それが事実です。わたくしがあの日貴女に声を掛けたことが原因かもしれません」

ベリアルはそういつて眼を伏せた。

「そんな……」

「とにかく、元に戻るまでは神の御印には近づかない方が良いでしょう。わたくしほどになればそのくらいは平気なのですが、貴女はまだ変化の途中です。完全体になるまでは神の御印は危険でしょう」

そんなことを言われてしまった。

「とにかく今宵はお休みになってください」

その言葉に、再び強烈な睡魔が襲ってきた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3092w/>

---

第?部 ~ Belial ~

2011年9月9日09時50分発行